

北海道伊達市（国内6例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和4年11月8日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境

- ① 当該農場は山麓の海岸沿い高台に位置し、周囲を林や牧草地に囲まれていた。
- ② 農場の衛生管理区域外の北側に隣接して、雨水や浄化槽で処理した鶏舎内の排水を処理するための浸透池が存在し、調査時にはコガモ6羽が確認された。

2 通報までの経緯

- ① 飼養管理者によると、発生鶏舎（通報時40日齢）では、通常1日当たりの死亡羽数（淘汰羽数を含む。以下同じ。）は5～6羽程度であったとのこと。11月2日の死亡羽数は16羽であったところ、3日に23羽、4日に62羽、5日に66羽となったが、当初は出荷サイズ調整のため飼料給与量の調整を開始した時期であったことから、これに伴うストレスを契機とした大腸菌症増加を疑っていたとのこと。6日に72羽死亡したことから、飼養管理者が死亡鶏を解剖検査したところ大腸菌症を疑う所見がなかったため、管理獣医師に連絡したとのこと。当該獣医師が立ち入った際に改めて死亡鶏を解剖検査したところ、大腸菌症を疑う所見が数羽で見られた一方、死因不明の鶏が多く見られたことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ② 発生鶏舎は農場の北側のほぼ中央に位置していた。飼養管理者によると死亡鶏は鶏舎内の全体に散在していたとのこと。
- ③ 調査時には、発生鶏舎の殺処分は終了していたが、家畜保健衛生所によると鶏舎全体で死亡鶏が散在していたとのこと。調査時、発生鶏舎以外の鶏がいる鶏舎では特筆すべき異状は認められなかった。

3 管理人及び従業員

- ① 飼養管理者によると、当該農場では、農場専属の飼養管理者3名が飼養管理等を行うほか、系列会社の飼養管理部門の担当社員1名が1週間に1回程度来場し、鶏舎内の状況を確認しているとのこと。
- ② 担当社員は1名で2地区の系列農場を担当しており、農場への立入りは原則として1日に1農場のみとしていたが、過去にはやむを得ず1日に2農場へ立ち入ることがあった。なお、その場合立入り時には系列会社の事務所でシャワー、着替え及び消毒を行っていたとのこと。
- ③ 飼養管理者は鶏舎ごとの担当分けはしていないとのこと。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 当該農場はセミウインドレス鶏舎16棟からなり、発生時は全棟で肉用鶏が飼養されていた。
- ② 飼養管理者によると、車両が農場に入る際は、農場入口に設置された車両消毒ゲートによる車両消毒を実施しているとのこと。
- ③ 飼養管理者は衛生管理区域内の事務所で農場内専用作業着及び長靴を着用していたとのこと。各鶏舎に入る際は、鶏舎入口の前室側に置いた踏み込み消毒（逆性せっけん。数日に1回交換）槽内で鶏舎外作業用の長靴を脱いで鶏舎内に置いた専用の長靴に履き替え、鶏舎内に置いた消毒スプレーで手指を消毒していたとのこと。調査時には、一部の鶏舎で消毒スプレーが空になっていた。
- ④ 鶏舎に立ち入る外来者は、衛生管理区域内の駐車場で持参した農場内専用作業着、帽子及び長靴の着用及び消毒を行っていたとのこと。鶏舎間の出入り時には長靴及び手指の消毒をしていたとのこと。

- ⑤ 鶏舎に立ち入らない外来者は、場内備付けの農場内専用作業着、長靴に交換していたとのこと。
- ⑥ 鶏舎は、壁面上部に吸気口があり、開閉用の蓋と網目が約2 cmの金網が設置されていた。開閉用の蓋は、コンピュータ制御により自動で開閉するとのこと。また、壁面下部の外側にはクーリングパッド、その内側にはロールカーテンと網目が約2 cmのプラスチック製ネットが設置されていた。ネットには多数の破損箇所があり、一部は針金によって補修されていた。
- ⑦ 鶏舎奥及び側面の壁には排気ファンが設置されており、自動で運転制御されていた。鶏舎内側には網目が約2 cm×約4 cmの金網、外側にはシャッターが設置されていたが、調査時、発生鶏舎では排気ファン1か所で金網が脱落し、ファン停止中だがシャッターブレードが開いている部分も確認され、野生動物の侵入が可能と考えられた。
- ⑧ 調査時、発生鶏舎外壁のトタン板の1か所がずれて鶏舎内部構造が露出していた。出荷用出入口の扉2か所（外部及び前室の間並びに前室及び鶏舎間）は閉鎖時でも壁面との間に約2～3 cmの隙間があった。前室には排水用の外部に通じる塩化ビニール製のパイプが2か所あり、ネット等は張られていなかった。これらからは野生動物の侵入が可能と考えられた。
- ⑨ 鶏舎横の飼料タンク上部には蓋が設置されており、全ての鶏舎で鶏舎内のラインを通じて自動給餌を行っていた。
- ⑩ 飼養鶏への給与水は井戸水を利用しており、塩素消毒を実施していたとのこと。
- ⑪ 通常、数日かけてオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は数日かけて鶏舎内の除糞と清掃・消毒を行い、その後の空舎期間を5～6日程度設けていたとのこと。
- ⑫ 直近のオールアウト及び鶏糞の運び出しは1か月以上前だったとのこと。
- ⑬ 通常、33日齢で中抜き出荷を行っており、自社の食鳥処理施設へ搬出していたとのこと。10月31日に5号鶏舎、6号鶏舎及び発生鶏舎（7号鶏舎）からの中抜き出荷を行ったとのこと。
- ⑭ 死亡鶏は毎日の健康観察時に回収し、鶏舎入口の外側にビニール袋に入れて置いており、ほぼ毎日自社運送車が農場内に入場して回収していたとのこと。
- ⑮ 重機や器材などの他農場との共用はなかったとのこと。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 農場内では野生動物はほとんど見かけず、野鳥ではカラス及びスズメを見るほか、まれにキツネを見たことがあるとのこと。調査時には、農場敷地内や鶏舎の屋根上にハシボソガラスが確認された。また、発生鶏舎前室に食肉目の動物のものと思われる古い糞が落ちていた。
- ② 鶏舎内においてネズミを見かけることがあり、ネズミ対策として鶏舎前室に殺鼠剤を設置していたとのこと。調査時には、発生鶏舎を含め鶏舎内にはネズミによるものと思われるプラスチック製ネット、ロールカーテン、クーリングパッド等のかじり跡が確認された。

(以上)